
Sugarless

青葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sugarcakes

【Zコード】

N7751X

【作者名】

青葉

【あらすじ】

新蘭パラレルです。この話では新一と蘭は年が2つはなれていると言つ設定です。

幼いころ、新一と出会い、

仲良くなつた蘭。幼いながらも新一の事が好きだと思うようになつた蘭だったが、学年の違う2人はやがて交流がなくなつてしまつ。それから数年、高校生になつた蘭が見たものは、学校で1番の人気者となつた新一の姿。久しぶりに話して、やはりまだ新一が好きだと自覚する蘭。蘭の事を大切に思つ新一。甘いけど、甘くない、2人の恋。

1番最初の思い出（前書き）

他のもどん詰まつてゐるクセに新連載はじめました。
これまたのんびり更新になります。

1番最初の思い出

ある日の毛利家

「おかあさん。エリートのへんの？」

「お母さんのお友達のところへ。蘭も来る？」

「うそっ。行く。」

やつして幼い蘭が母、英理に連れていられたのは

「わ～、おこおこお家だね！ おかあさんのお友達、エリート住んでる
の？」

小さな子どもにとつても、大人にとつても、巨大な邸宅。
そして蘭がそこで出合つたのは

「あら～、英理ちゃんいらっしゃい！」

その子はもしかして蘭ちゃん？ かわいいわね～

母である英理に負けず劣らず綺麗な女性と。

「じゃあ蘭ちゃんの面倒は新ちゃんに見ててもいいのかしぃへ。
新ちゃん！ 本ばっか読んでないでちょっと来なさいーーー。」

「なんだよ母さん。今いじとこだつたの?」

ぶつくわ言こながら現われた自分よりも少し年上と見られる少年。

それが、蘭の新一との初めての出会いだつた。

入学式の朝（前書き）

最初だけ連続投稿。

入学式の朝

それは、幼い頃の優しい記憶。

有希子に呼ばれ、蘭の相手役を任された少年は渋々ながらも蘭に話しかける。

ホントやがんばるやつだ。5歳い。おまえは?』

幼稚園の同級生以外で初めて話す、年上の少年に対し、少し緊張しながら蘭は答えた。

どうしよう、と蘭は困り顔で英理をみた。

۱۱

あまりの心細さに泣き出しそうになつたその時、わずかに開いたその口になにかが放り込まれる。

びっくりして目を開けるとそこには新一の姿が。新一は目を丸くしてる蘭に笑いかけると、

『母さんに』もうつたおかしだ。

泣いてたりしょつぱくなるぞ』

そう言うなり、蘭の手を引つ張り、家の外へと連れていく。

『ねつ、ねえ、どうぞいいくのー?』

急に引つ張られ、慌てて靴を履きながら、新一に訊ねる。

『新古今和琴』

そしてそのまま連れてしかれた場所には

すけい！お花かいにはい！

異の花が咲くに咲く花火

『一ノアハナ』、『アマツノミコト』、『アマツノミコト』、『アマツノミコト』

1

読書を中断させられ、自分の相手をするのを嫌そうとしていたのに、わざわざ「」など「」に案内してくれた。 そう思つと蘭は嬉しくて新一の抱きついた。

『ありがとう、しんいちおにいちゃん!』

『わ、ちよ、やめなさいばー！

だいたいなんだよ“ しんいちおにいちゃん” こて！』

いきなり抱きつかれて赤くなり、蘭を引き離しながら新一は言つ。

『だつて、しあわせにこわさんはわたしがつねにやさしくして
?』

年上の男の子はおこちゃると呼ぶのだと教えられた蘭は不思議やうに話を返す。

新一を“おこちゃん”と呼んではいけないのか、と。

『だから別におこちゃんなんをつけなくともこっだらへ。』

しんこちおこちゃんと呼ばれたくなかった新一はそれを辞めるとやうにやう。

『えへ、だつたひびきばよこのへ。』

他の呼び方があるのかと不満のじみ出た声で蘭がもう一度聞くと、

『しんこちって呼べばいいだろー?』

オレもおまえのいと、りそひて呼ぶからやー。』

やつ、返ってきた返事は、蘭はまことに顔を輝かせる。

『うそー、じゃあやつ呼ぶーだから、しんこち、これからもわたしとあそんでくれるー。』

年下の少女のそんな無邪氣な問いかけに、読書の邪魔をされた不機嫌さをすっかり忘れた新一は、

『しょーがねーなーこつでも家にいこよー。』

力強い笑みと共にその手を差し伸べた。

幼い蘭はその手をとるつとし、手を伸ばし

ペペペッ ペペペッ

「あ、れ・・・？」

どこか気の抜けた声を出しながら蘭は田を覚ます。
夢の中で伸ばした手が空を掴んでいる。
とこ「じ」とは、

「夢、か・・・・」

そう、あれは夢だ。

もう蘭は3歳ではない。

母である英理も父と喧嘩したまま別居中。

父は刑事を辞め、今は卖れない探偵だ。

あれから十数年経ち、蘭も今日から高校生になる。でも、

「なつかしい夢だったな」

小さい頃、一番仲の良かった少年を思い出す。この十年ばかりの間に、彼とはすっかり距離が開いてしまい、彼の小学校卒業と同時に毎年やりとりしていた年賀状すら出さなくなってしまった。

おまけに蘭は受験当日、風邪で寝込んでいたため、新一の行つた帝丹中学に通えなかつた。

だが、今日からは、

今日からは彼と同じ帝丹高校に通う事が出来る。べつに新一がいるから帝丹を受けたわけではない。中学の時のリベンジだ。

だから、新一のことなど関係ないと言えばそうなのだが、

「会いたいな・・・久しぶりに」

たつた今まで見ていた夢のせいか、むしょうに会いたくなつた。

1年生と3年生。

学年は違えど同じ高校なんだから、きっと会えるよね、と思い、蘭は朝の支度を始めた。

入学式（前書き）

お久しぶりです。

今回は入学式。

・・・なかなか新一が出てこない！

入学式

朝食をしつかりと摂り、真新しい制服に身を包んだ蘭は父と共に帝丹高校へ向かつた。

校門には、母である英理の姿。

蘭の入学式の為にわざわざ仕事を調整して来てくれたのだ。

それが嬉しくて蘭は声を上げて子供の様に英理の元へかけよる。

「お母さんー！」

「蘭、おめでとう。制服似あつてるわよ」

「ホントー？ ありがとうー！」

嬉しそうに笑う蘭に、英理は『ちょっと動かないでね』と一声かけるとその首元のネクタイに手を伸ばすと、一度ほどいてからしっかりと結びなおす。

その後1歩退いてから蘭の全体を見渡し、OKを出す。

そこへ丁度小五郎がやって来る。

「おつ」

スーツのポケットに両手を突っ込みながら現れた夫を見て英理が顔をしかめる。

「ちょっとなーに、その格好？ ネクタイも曲がってるじゃない！」

娘の入学式へ「うらこ」しつかりしなさいよね？」

言いながら、先ほど蘭にやつたのと回じよつて小五郎のネクタイを締め直す。

「つたぐ、朝つぱらから口つるせー オバサンだな・・・『わよわ!』

顎を上げながら文句を言つた小五郎が漬された鳥の様な声を出す。英理がネクタイを思いつきり締めたのだ。

「口つるせーされたくないのなら、ちやんとする」と、ヌケサク
髭オヤジ」

絶対零度の声で言われた小五郎が、『なにおつ!?』と歯をむき出しにし、英理を睨みつけ、英理もまた負けじと相手を睨む。一触即発モードとなつた2人を引き戻したのは、他ならぬ娘の蘭だった。

「もつ! 2人ともこんなとこりで止めてよ!
どーして会つたびにいつもちやうのよ!?

泣き出しそうな声に小五郎と英理は我に返る。

「「」めぐね蘭。今日は貴女の入学式なのに・・・」

「おー、蘭ー心配すんなつて。別に俺達は本気じゃないんだし」

慌てた小五郎たちはあの手この手で蘭を宥め、今夜は親子3人で食事することを約束し、よつやく蘭の機嫌を取り戻した。

機嫌を取り戻した蘭に、さらに嬉しい事が起きる。講堂の前に貼つ

てあるクラス分けを見ると、小学校からの親友の鈴木園子と同じクラス、1年B組になつたのだ。

校門の前にある【帝丹高校 入学式】と書かれた看板の横に立ち、まずは蘭一人。次に蘭と英理、蘭と小五郎。そして最後に近くにいた誰かの父兄に頼み親子三人で写真撮影をし終えると丁度新入生集合時間となり、蘭は講堂横の集合場所に向かつた。

残された小五郎と英理はやや気まずそうにしながらも、写真を撮っている間にお互いへの不満も流れたのか、仲良く講堂へと入つていった。

帝丹高校の入学式はいたつて普通のもので、教頭の司会の下に進められる。

『新入生、入場』

マイクで拡張された声が響くと、講堂の入口から新入生が厳かに入場してくる。

全員が入場し終えると着席。

その後、点呼。

クラス毎に担任が名前を読み上げ、名前を呼ばれた1年生達が返事をしながら次々と立つ。最後の1人が呼ばれると今度は『新入生誓いの言葉』だ。

再び教頭がマイクの後ろに立つ。

『新入生、誓いの言葉。新入生代表、1年B組、森山雄貴もりやまゆうき』

「はい！」

呼ばれた生徒のはきはきとした返事がこだまする。

B組と言つと、蘭と同じクラスだが、知らない名前だつた。どうやら園子も知らないらしく、前方の席で首をかしげている。だが新入生代表と言つ事は入試の成績がトップだつた、ということだ。

どんな人物なのか、気になる。

その森山と言う生徒は蘭の座つている列の一番右端から通路に出るとステージへと歩いていく。

彼がステージに上がり、校長の前に立つと、女生徒から黄色い声があがる。

「ねえあの人、カッコ良くない？」

「しかも成績トップつてことは頭もいいんだよね？」

「どこの人！？」

「いいな～、あたしもB組が良かつたあ

そんな女生徒のざわめきは、教頭の『静肅に』の一言で徐々に小さ

くなる。

騒ぎが落ち着いたところで誓いの言葉が始まる。

『宣誓。本日入学を許可されました私達、240名は帝丹高等学校の生徒としての自覚と誇りを持ち、十分に勉学に励むことを誓います』

マイクを通してはつきりとわかる、心地よい声にまたもや女生徒が騒ぎ出す。

教頭は、もはや注意する気も失せたのか、何も言わない。

その後、校長の長い長い祝辞が続き、入学式は終わりを迎えた。

入学式（後書き）

うーん、高校の入学式ってこんななんですよかつたっけ？とか思つけどまあいいか！

ちなみにこの誓いの言葉は青葉が高一の時に言わされたのを少し変えたものです。

あと、ちょっとネタばれだかど、今回でまたオリキャラの森山君、このトキはまだ出番はあります。

新一登場までもうひょっとお待ち下せこ^三(—)三^

1年B組（前書き）

蘭が蘭つぽくないかな
・・・

入学式が終わると、次はそれぞれの教室へ移動した。

担任を先頭に一列に並んで講堂から教室に向かう。

蘭は園子と話したかったのだが、教室に入るとそのまま出席番号順に着席となつたので、とうとうそのチャンスは巡つてこなかつた。

自分の席に座り、周囲に知り合いがないか確認してみるが、生憎、B組には園子以外に知つた顔がない。少し不安に思いながら教卓の方を向こうとしたその時、隣の席の人物と目があつた。

「あ

その人物は蘭と目が合うと、にっこりとほほ笑みかけてくる。

邪氣のない笑みに今まで抱いていた不安が薄れ、蘭も相手に薄く笑い返すと前を向く。

その人物 先ほど新入生代表を務めた少年、森山雄貴はほんの一瞬、蘭の横顔を見、同じく前方に視線を向ける。担任の挨拶が始まった。

「はい、皆さん。まずは入学おめでとう！

私はB組の担任の東田ひがしだとおもいます。

受け持ちの教科は数学です。以後、よろしく

そう極めて簡潔に自己紹介を済ますと、東田は生徒全員に自己紹介をさせていった。

自己紹介の順番は男女交互で、男子の1番の次は、21番の女子、

2番の男子、22番の女子・・・と言つた感じだ。

「26番、鈴木園子です！出身は米花中…
部活はテニスやつてました！
ちなみに恋人募集中で～す！」

親友の元気の良すぎる自己紹介にB組はどうと湧く。

そういうところで、あつという間に順番が1個前まで来た。

「16番の森山雄貴です。出身中学は杯戸南中。部活は何に入ろうか迷っています。よろしくおねがいします」

入学式のときと同じく、彼の登場に女子が賑やかになる。それが治まつてから蘭は立ち上がつた。

「えっと、36番、毛利蘭です。米花中出身。あ、控手やつてます。よ、よひしー。」

緊張のあまり最後の方は噛みながら着席する。

蘭は心の中で、さう思ふなりながら、笑う。

だから、気づいていなかった。

生徒全員の自己紹介も終了し、担任による今後の説明が終わると、ようやく今日の学校が終わった。

蘭は配られた資料を鞄につめ、帰る支度をすると園子の元へ行つた。

「園子へ、また同じクラスでよかつた！」

「私もよかつた！蘭と一緒に宿題とか見せてもらひやるもんね！」

「もー、園子つてば！」

「あははは、冗談、冗談。

ま、半分は本気だけどね・・・

今日はお母さんも交えて食事なの？」

元気に笑いながら園子が訊ねてくる。
それに対し、蘭は嬉しそうに答えた。

「うん。一田家に帰つてから着替えて行くんだ！」

「そつかー良かつたわね。

私も今日はウチで盛大なパーティーよん

そう言いながら鞄を持つと園子は蘭と一緒に教室を出る。
2人は玄関のところで自分たちを待っていた両親と合流するとそれ
ぞれの家へ帰つて行つた。

1年B組（後書き）

なんか微妙な終わり方ですね。
すみません（^_^）

懐かしい人（前書き）

お久しぶりです！！

いつの間にか放置1週間・・・

学祭終わったら多分もう少し更新できるかと。

懐かしい人

入学式の翌朝、蘭はいつものように台所で朝食を作っていた。だが、中学の時と少し違う点がある。

蘭は朝食を作りながら、お昼のお弁当も作っていた。中学時代は給食あったのだが、高校ではそれがない。その代りに生徒達は購買でパンを買つか、学食を使う。しかし購買にしても学食にしても、お昼時は非常に混雑するサバンナ地帯と化する。

それを避けるためには、弁当しかないので。

昨夜の英理を交えての親子3人での食事は、英理と小五郎がなかなかいい雰囲気になっていたので少しばかり機嫌がいい。

鼻歌を歌いながら作ったおかずを2つの弁当箱に詰めていく。綺麗な空色のが蘭の弁当箱。よくある様な銀色のは小五郎のだ。いつもは父にお昼を作つて置いたりはしないのだが、今日は機嫌がいいので特別だ。

しっかりと中身を冷ましてから蓋をすると自分の分をハンカチで包んで鞄に入れる。

それから小五郎を叩き起してから一緒に朝食をとり、使った食器を素早く洗うと鞄を掴み、学校へ向かう。

「いつてきま～す！お父さん、グーダラしないでちゃんと仕事するのよ！」

あと、今日のお昼はそこにあるから！」

毛利家の財布を握る蘭は、目を離すと毎間からビール片手に競馬又

は沖野三一のピートオ観賞をする父に釘をさす」とも忘れなかつた。

蘭は帝丹高校の校門に着いた時、怪しい人影に気づいた。

その人影は門のところに隠れて、中の様子をうかがっている。

(まさか不審者！？)

こんな所でこそそと中を覗いているなんて、不審者に違いない。
そう思つた蘭は迷わずその人物に近づくと声をあげる。

「ちょっとあなた！何してるのよ！？」

するとその人物はビクリと肩を大きく震わせて振り向く。
それと同時に蘭は気づく。

相手が、帝丹高校の制服を着ていることに。
しまつた、間違つた。と後悔に襲われていると、振り向いた恰好の
まま硬直していた相手が口を開く。

「ら、蘭……か？」

「え？」

相手の口から自分の名前が飛び出したことに驚き、その人物の顔を
まじまじと見つめる。

そこにあるのは

記憶にあるよりもずっと大人びた、整った顔立ち。

昨日見た夢よりも、伸びた背。

あの頃よりも幾分低くなつた、けど耳に優しい声。

ふと会いたくなつた、の人。

「しんいち・・・?」

工藤新一、その人であつた。

「おはよー、蘭」

「あ、園子おはよっ！」

朝の教室で、一番最初に会った親友に挨拶をする。が、どうも園子の様子がおかしい、と蘭は感じた。いつもは元気いっぱいなのに、今日はダルそうに見える。

「どうしたの？園子、なんか元気ないよ？」

心配になつて声をかけると、力の抜けた返事が返ってきた。

「あつたりまえじゃないのよ。むしろなんで蘭はそんなに元気なのよ？」

「え、元気つてそれは・・・」

会いたいと願つた人に会えたから。

先ほどの新一との再会を思い出して、瞬間、蘭の顔が赤くなる。そしてそれを見逃す園子ではない。

「あ～、赤くなっちゃつて！」

「なになに！？ 素敵な人でもいた！？ 教えなさいよ～」

途端、元気になつた園子が蘭の腕を掴んで揺さぶる。

「あ、え、そんなんじゃないわよ！ とにかくでどうして元気ないのがあたりまえなのよ？」

赤くなつた頬をさらに赤くしながら蘭は話を強引に戻す。すると園子は『「まかしちやつて』などとブツクサ言いながらも

理由を言った。

「だつて今日はテストじゃない！テ・ス・トー。
まあ一つたく、せつかく受験終わったのにいきなりテストなんてやつてうんないわよ～」

「へ？ テスト？」

蘭にとつては寝耳に水で、思わず間の抜けた声をだす。
すると今度は園子も驚いた顔になる。

「蘭、アンタまさか忘れてたのー？ 入学のしおりに書いてあつたじ
やない！」

“入学式の翌日はテストがあります”つて！

「・・・やう言えば」

そんなこと、書いてあつた様な気がする。
今の今までつかり忘れていた。
蘭の顔がさつと青ざめる。

勉強、していない。

もう結果は、決まったようなものだつた。

懐かしい人（後書き）

新一 登場！（ようやつと）
なぜに彼が校門付近でこそこそやつてたかは後でわかります。
たいした謎ではないのですけどね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7751x/>

Sugarless

2011年11月17日12時40分発行